

命をつなぐ

小児がん

治療の

現場から

小

児がんには大きく分けて血液のがんである白血病、脳腫瘍、そして固形腫瘍があります。今日お話しする固形腫瘍とは子どもたちの体に「塊(かたまり)」を作るがんのことです。わが国においてはおよそ年間600例が発症すると推定されます。

神経芽腫、肝芽腫、腎芽腫、網膜芽腫などの芽腫(がしゅ)と呼ばれる腫瘍が多いのが特徴です。正常な臓器の細胞になるはずだったのに未熟な細胞のまま無秩序に増殖し(がん化)、塊を作ります。つまり体中のどこからでも、しかも体の深いところから発生するわけです。全体としては1歳から5歳に発生のピークがありますが、1歳未満や思春期以降に多くみられる腫瘍も存在します。

初期には症状がなく、ある程度大きくならないと発見されないことが多く、健診で偶然見つかるケースもあります。小さい子どもたちでは、着替えや入浴時に保護者の方が体の変化に気づかれることもある一方で、思春期では症状があっても子どもたちが話すのをためらったまま過してしまっていることも。一部の小児固形腫瘍では、早期診断が良い予後、治療の減弱、少ない治療合併症につながる事が知られており、迅速な診断は非常

第③回

小児固形腫瘍(かたまりを作るがん)

初期症状ないケースが多数 抗がん剤や放射線治療を併用

に重要です。超音波検査、CT・MRI検査などの画像検査は診断に欠かせません。発生部位とその広がりを知り、腫瘍のすべてあるいは一部を手術で取り出し、その細胞を顕微鏡で確認します。現在では、がん細胞の遺伝子の情報も治療内容の決定に大切な役割を果たしており、そのためには小児がん専門施設での診療が必要となります。

手術による腫瘍の摘出術は治療の大事な要素ですが、同時に体の機能を温存することも重要になります。また小児固形腫瘍の多くは発見の時点で全身に微小な転移があると考えられるため、手術を無理することなく抗がん剤、放射線治療を組み合わせることも多いです。

小児固形腫瘍の子どもたちの70%は治療する時代となりました。小児がんに精通した小児がん認定外科医は、子どもたちの「今」だけでなく、「治療後の長い人生」を考え、その役割を果たします。今回は小児脳腫瘍についてお話させていただきます。

● 小児固形腫瘍の症状 ●

